

変わりゆく大学図書館員の役割

有川, 節夫
九州大学 : 総長

渡邊, 由紀子
九州大学附属図書館 : 利用支援課長 | 九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/1446199>

出版情報 : The journal of Information Science and Technology Association. 64 (6), pp.200-206, 2014-06. Information Science and Technology Association

バージョン :

権利関係 :

変わりゆく大学図書館員の役割

有川 節夫*1, 渡邊 由紀子*2

科学技術・学術審議会の学術情報基盤作業部会（2010年）及び学術情報委員会（2013年）による「審議のまとめ」をふまえ、主に大学図書館を対象に、図書館員の変わりゆく役割について考察する。現在の日本における大学や大学図書館が置かれている状況を整理したうえで、今後の図書館に起こり得る変革も視野に入れて、大学図書館員に求められる新たな期待と役割について説明する。また、九州大学が2011年に開設した「教材開発センター」や大学院「ライブラリーサイエンス専攻」等の活動を紹介しながら、図書館員の人材育成・確保のための仕組みを構築する方法について述べ、最後に、図書館員の未来について展望する。

キーワード：大学図書館、大学改革、図書館員、専門性、人材育成、サブジェクト・ライブラリアン、教材開発、ライブラリーサイエンス、九州大学附属図書館

1. はじめに

本稿では、主に大学図書館を対象に、図書館員の変わりゆく役割について説明し、図書館員及び図書館員を目指す人へのひとつのヒントを示したい。筆者の一人は、2013年1月までの数年間にわたり、文部科学省の科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会に置かれた「学術情報基盤作業部会」の主査として、コンピュータやネットワーク、大学図書館、学術情報発信等について、系統だった審議を行い、いくつかの提言を行ってきた。この作業部会及びその発展形としての「学術情報委員会」による、大学図書館に関する最近の提言としては、2010年12月の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」¹⁾（以下、「審議のまとめ2010」）、2013年8月の「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議のまとめ）」²⁾（以下、「審議のまとめ2013」）がある。当然これらの審議のまとめを念頭においた形での「大学図書館員へのヒント」ということになるが、筆者らは、既に、「審議のまとめ2010」における二つの柱である大学図書館員の育成・確保について報告し、図書館員養成の新たな仕組みについて紹介してきたので³⁾、本稿では、九州大学が新たに取り組んでいる「教材開発センター」や大学院「ライブラリーサイエンス専攻」等の活動を紹介しながら、大学図書館員に求められる新たな期待と役割について述べることにする。

なお、本稿では、一般的な「図書館員」ではなくて、「大学図書館員」を対象にするが、それは、この十数年間に、大学図書館と他の公共図書館等とは、その性格や機能・役

割が大きく違ってきたからである。もちろん、大学図書館は社会に開かれているので、一般市民も利用できるが、基本的には、大学で学ぶ学生と大学で教え、研究する研究者のための図書館である。学生は、図書館で教科書や参考図書等の書物を借り、大学図書館のサイトやネット上にある電子的な図書や教材等にアクセスしながら学習の空間として図書館を使い、最近では、仲間とのディスカッションの場としても使っている。また、学生とはいっても、修士課程の2年生や博士後期課程の学生は、研究者と同様に論文を執筆する。研究者は、図書や学術論文の執筆に加えて、論文誌の場合には、査読者や編集者という側面ももつ。そのような利用者がいる大学図書館では、近年、機関リポジトリという形で、学術論文の「出版」も始めている。そして、図書館員は、教育にも係わり、学生に対する情報リテラシー教育を行い、大学院における教育を担当するなど、教員との境目も希薄になってきている。さらに、国際化に関しては、ユーザーとしての外国人留学生の協力を得て、例えば、ホームページの四カ国語対応等が自然な形で実現している。このように、大学図書館と、その他の図書館、あるいは学内の他の部局との間には大きな違いが生まれている。

2. 大学図書館を取り巻く状況

まず、現在の日本における大学を取り巻く状況、大学図書館の置かれている状況について整理しておこう。

近年の少子高齢化や雇用問題、厳しい財政状況等の国内問題に加え、新興国等の台頭による競争の激化、地球環境問題、資源・エネルギー問題等、地球規模の課題も顕在化し深刻化している。また、2011年には、千年に一度とも言われる東日本大震災に遭遇し、それに伴って発生した津波による甚大な被害、原子力発電所の事故等、解決すべき大きな課題に直面している。こうした問題や課題は日本の科学技術や高等教育にも大きな影響を与えており、それらの変化に対応するために、大学には教職員の意識改革も含め

*1 ありかわ せつお 九州大学 総長

*2 わたなべ ゆきこ 九州大学附属図書館 利用支援課長／統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻 准教授
〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学附属図書館
Tel. 092-642-2331 (原稿受領 2014.3.24)

て様々な改革が求められている。国立大学の場合は、特に法人化以降、毎年の運営費交付金の削減を伴い、内容的にも時間的にも厳しいものになっている。

例えば、2012年6月の文部科学省「大学改革実行プラン」及び8月の中央教育審議会答申や現在進行中の文部科学省と各大学との協議によるミッションの再定義に加え、2013年には、自民党や政府、文部科学大臣、中央教育審議会等から、大学、特に国立大学に機能強化や目に見えるスピード感のある改革を求める提言や要請が、相次いでしかも具体的な形でなされた。中でも、2013年11月の文部科学大臣による「国立大学改革プラン」⁴⁾は、今後の国立大学改革の方針や方策、実施方針をまとめたものであり、2013年度から2015年度までを改革加速期間として設定し、並行して第3期中期目標期間が開始する2016年度以降にかけて、自主的・自律的な改善・発展を促す仕組みの構築を各大学に求めている。

こうした、大学への要請は、大学図書館にも影響があるが、大学図書館については、冒頭で述べた二つの「審議のまとめ」で直接的な提言がなされている。特に、「審議まとめ2013」では、学修環境の充実が求められるようになった背景として、

- オープン・エデュケーションの促進(e-ラーニング、OCW、MOOC等)
- 授業スタイルの変革(学生の主体性を促す反転学習等)
- 大学教育における質的転換(教育システムの改善、授業外学修時間の確保)

を列挙している。

また、2012年8月の中央教育審議会答申の中で、「学士課程教育の能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換」が指摘され、2013年6月に閣議決定された教育振興基本計画では、「学生の主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化、ICTを活用した双方向型の授業・自修支援」等を促進するとしている。このように、大学教育改革として、学生の授業時間外における自主的学修を増加させるとともに、ICTの活用により教育の質的向上を図る必要があり、そのための場所・ツールとなる図書館や学術情報基盤の整備が極めて重要と認識されている。

3. 図書館に求められる変革

次に、今後の図書館に起こり得る変革も視野に入れて、図書館の変化や役割、機能、課題等についてまとめておこう。

3.1 九州大学での図書館改革

筆者の一人は、1998年4月から2008年10月の総長就任直前まで、中断を挟んで実質約10年間にわたって九州大学で附属図書館長を務めてきた。最初の図書館長就任時に「大学図書館基準」⁵⁾等に照らしてこれからの大学図書館の課題やビジョンを明確にし、それを大学の図書館報に公表した⁶⁾。そして、機会ある毎に学内外に向けてそこで示

したビジョンを表明しながら、当時九州大学が抱えていた問題、また大学が共通して直面していた課題を列挙して、それらを組織的に解決してきた⁷⁾。2003年6月には、2004年度からの国立大学法人化を前に、国立大学図書館協会の第50回記念総会において「図書館が変われば大学は変わる」と題して基調講演をした⁸⁾。その講演では、大学改革ということを考える際に、図書館を大学の中心に置いて、図書館員が「図書館が変われば大学は変わる」のだという意識を持ちながら仕事をしていくことが重要であることを指摘した。

九州大学では、まず、図書館から変わらなくてはと考へ、国立大学法人化前の2000年に、

- 学問的雰囲気と活気に満ちた学習図書館の実現
- 体系的な蔵書と豊富な研究資料が確保され、ネットワーク社会の恩恵を享受できる機能的で充実した研究図書館の実現
- 経営感覚を備えた事業体としての大学図書館の運営という三つの観点から、以下のような図書館の「長期目標・理念」を掲げた。

- 1) 大学図書館基準(昭和27年制定、昭和57年改正)が示す大学図書館の機能を第一の目標とする。即ち、大学における教育研究の基盤施設として、学術情報を収集・組織化・保管し、これを利用者の研究・教育・学習のための利用要求に対し効果的に提供することを旨とする。
- 2) 電子化資料の整備を進めることを第二の目標とする。即ち、紙媒体での学術情報の収集・組織化・管理・提供という従来からの図書館機能に加えて、学術情報の創造・発信とその世界規模での共有という新たな機能を充実し、さらに昨今の急激な電子化・ネットワーク化の動きに対応して、オンラインジャーナルへのアクセスを確保するという情報配信機能の整備を図る。
- 3) 九州大学の新しい機能と組織に対応した大学図書館を構築・運営し、大学改革と活力ある大学づくりに積極的に寄与することを第三の目標とする。

以来、図書館員の意識改革と努力等によって、2014年現在、これらはすべて実現できたと思っている。

過去には「大学図書館基準」はお題目と化していた。実際、基準としては、体系的であり、立派なものであるが、当時は、どこの大学でも、それに則って自分たちの大学図書館を改革しようという意欲は感じられなかった。九州大学では、その基準を満たすことから図書館変革を始めた。それは、図書館内あるいは大学内でのコンセンサスを得る上での戦略でもあった。現在では、全国的に見て、この基準や審議のまとめ等に注意するなど、大学図書館関係者の意識も変わってきたように思う。

3.2 大学図書館に求められる機能・役割

「審議のまとめ2010」では、大学図書館は、大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般

を支える重要な学術情報基盤の役割を有しており、大学の教育研究にとって不可欠な中核を成す総合的な機能を担う機関の一つであるとしている。その上で、大学図書館に求められる機能・役割として、

- 1) 学習支援及び教育活動への直接の関与
- 2) 研究活動に即した支援と知の生産への貢献
- 3) コレクション構築と適切なナビゲーション
- 4) 他機関・地域等との連携並びに国際対応

を挙げている。そして、これらの機能・役割を実現するために、各大学が戦略的に図書館員の育成・確保に取り組むことを期待している。

また、大学図書館の組織・運営体制に関しては、我が国の大学が現在求められている業務の効率化と人件費の削減の下では、専任職員と臨時職員が担うべき業務と、外部委託等に委ねることが可能な業務との分けも考慮した大学図書館の業務体制の在り方を模索することが必要であり、その際、大学図書館における業務の中核となる部分には、専門的な能力を有する人材が必要であると指摘している。最近、大学では、研究者の研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化等を支える業務に従事する人材であるURA (University Research Administrator) が、大学における教員、事務職員に並ぶ第三の職種として注目され、その配置が推進されている。また、教員については、柔軟な人事ということで年俸制度の導入を要請されている。このような動きに鑑みて、専門的な能力を必要とする大学図書館員についても、「第三の職種」としての位置付けや、海外も含めて多様な経験を積んだ有能な職員の確保という面からの年俸制についての検討も意味があると考えられる。

「審議まとめ2013」では、学修環境充実に関わる学術情報基盤整備について指針を示している。学術情報基盤を、最新の教育研究成果に基づく書籍、論文、データ、教材等のコンテンツ、それらを流通させるためのシステムや情報ネットワーク及び情報を利活用する際の物理的空間や人的支援を提供する図書館を含む概念と捉え、その整備について、主に、コンテンツ、学習空間、人的支援の三つの要素に整理したうえで、それらの有機的な連携が重要としている。

「コンテンツ」に関しては、教科書や参考書、その他の図書資料に加えて、電子的コンテンツの整備も進み、ネットワーク上にある様々なコンテンツにもアクセスできるようになっている。「学習空間」については、ラーニングコモンズと呼ばれる新しい形の学習空間の整備が急速に進んでいる。十数年前までは、図書館では、「静粛に」という張り紙が随所に見られたし、PCのキーボードをたたく音や本のページをめくる音にさえ神経を使うという有様であった。しかし、このような新しい学習空間は、学生たちが勉強するだけでなく、集まって授業などにおいて仲間で議論する場所として賑わっている。図書館内には自販機もあり、お茶を飲むこともできるし、話をすることもできる。もちろん、個人あるいはグループで使える静かな学習空間もある。学習空間としてのラーニングコモンズは、学生同士のコ

ミュニケーションの場所としても重要な空間として定着しつつある。「人的支援」に関しては、大学図書館がこうした学習空間を用意するだけでなく、千葉大学のアカデミック・リンク・センターや九州大学の嚶鳴天空広場Q-Commonsのように、図書館員を配置し、学習や情報リテラシーに関する相談に応じ、全体をコーディネートする等、新しい形の学生向けの人的支援を行っているところも増えている。

大学図書館は、インターネットや図書資料の電子化、電子ジャーナルの定着によって、空間としての存在価値を危ぶむ時期もあったが、こうして新たな形で、特に、学習空間として認識され、少子化時代における大学経営戦略上も価値を持つようになってきた。なお、大学図書館におけるこうしたコミュニケーションの場としての図書館機能は、高齢化社会における公共図書館においても見られ、その重要性が認識されつつある⁹⁾。

4. 図書館員に必要な専門性

変革を促進するために、大学図書館員には、従来の目録等の専門スキルの他に、サブジェクト・ライブラリアンあるいはシステム・ライブラリアンとしての能力、経営・マネジメント能力等、各種の専門性が求められるようになってきた。こうした、新たな役割や能力について、「審議のまとめ2010」を中心に考えてみよう。

4.1 業務内容の変化に応じた図書館員の資質・能力

大学図書館では、資料の収集・組織化・蓄積・提供等の「資料収集・提供関連業務」や貸出・レファレンス・相互貸借・情報リテラシー教育等の「利用者サービス業務」、その他、ホームページの管理業務や館内の整備、図書館システムの管理といった伝統的な業務に加えて、次のような「学習・教育・研究支援を担う専門家」としての新しい業務が顕在化してきた。

- 1) カリキュラムと直結した資料整備
- 2) 情報リテラシー教育への直接的関与
- 3) 研究に直結するレファレンス
- 4) 大学の研究成果の集積と発信
- 5) 学生・教員の間（研究者間）の学問的交流の場を大学図書館として提供するラーニングコモンズの運用

このように、伝統的な業務の充実を図るだけでなく、これからは、様々な媒体の学術情報を駆使し、学生の学習、教員の教育・研究により積極的に関与する専門家としての役割が期待されている。そして、これらの変化に対応できるよう、「審議のまとめ2010」では、大学図書館職員としての専門性のほか、学習支援、教育への関与、研究支援、それぞれにおける専門性が、大学図書館員に求められる資質や能力として提示されている。

4.2 教材開発支援における専門性

図書館員が、前述のような専門性を総合的に発揮すべき新しい領域として、教材開発支援がある。ここでは、九州

大学が 2011 年 4 月に附属図書館に付設した教材開発センターを紹介しながら、教材開発支援における専門性について検討してみたい。

九州大学附属図書館付設教材開発センターは、大学における教材の質を向上することで教育の質を改善することを目的に設置され、教員の教材作成支援、センター独自の革新的な教材や教育方法の開発・提案など、様々な活動に取り組んでいる。このセンターを図書館付設にしたのは、図書館長を長い間務めた経験から、図書館員というのは極めて緻密なことを真面目に長時間やる人たちであることがわかり、その気質や仕事の丁寧さが教材開発に合うと考えたためである。また、図書館に「付設」とすることで、図書館員の意識が違ってくることも期待したからである。

教員は必ず自分の講義について何らかの教材を作って授業に臨んでいるはずである。その授業の中で、受講生と先生が一緒になって議論しながら、教材をよりよいものにしていくことが可能である。その教材作成をどこで行うかと考えた場合、学生も教員も行くところとして、図書館こそが最適な場所である。例えば、ある時間帯にある先生が図書館で教材を作り、学生とのインタラクションの中で「教材を変えていく」という方法は、アクティブラーニングとして学生参加型授業を行うことにもつながり、教育の仕方が劇的に変わることになる。そこで、九州大学では、そのような「一緒に教材を作りましょう」というためのプラットフォームとして教材開発センターを作り、教材開発を図書館員が支援する体制を整えた。これは、物理的な建物としても、コンテンツ面、機能面でも、理工系・人社系を問わず大学の中核になる仕掛けを大学図書館で考えた結果である。図書館員は、教材の素材となる学術情報等のコンテンツの管理と提供、機関リポジトリ構築で培った著作権処理のノウハウを活かした電子教材作成支援、教材のメタデータを一元的に管理して従来の目録データと共にディスカバリーサービスで利用者に提供するなど、様々な形で教材作成を支援する。

4.3 サブジェクト・ライブラリアンとしての専門性

図書館が新たな仕事をする一方で見落としはいけないことは、古い図書、すなわちコレクションを知っている人が必要だということである。図書館のコレクション構築において重要な役割を果たすのは、特定の学問分野に関する主題知識を持ったサブジェクト・ライブラリアンである。かつて大学が講座制であった時代には、教授一人、助教授一人、助手二人という人員構成が主流であり、その助手たちが、サブジェクト・ライブラリアン機能を果たしていた。ところが、例えば九州大学の文学部（人文科学研究院）では、1984年に21人いた助手が2013年には1人に減るなど¹⁰⁾、かつてのような助手が極めて少なくなっており、その仕事ができる人たちがいなくなってきた。ある領域を深く掘る研究者と比較すると、図書館員は横に広く掘ることになる。浅いけれども広いため、掘った容積としては研究者と同じになるはずである。このように、大学図書館では、

少し客観的に、しかし全体をながめてコレクション構築をする必要があり、それをサブジェクト・ライブラリアンが担当すべきであろう。

また、例えば、人文・社会科学系の研究では、文献を整理したり体系づけたりすることに多くの時間と労力がとられているように見える。そこに極めて優秀なサブジェクト・ライブラリアンがいれば、先生方の研究は劇的に変わるのではないだろうか。つまり、研究者の仕事とみなされている文献収集や情報管理を、図書館員が確実に行うことができれば、研究者はそれらの文献や情報を使って、その先のこと、新しいことができるようになると考えられる。そして、日本の大学図書館にサブジェクト・ライブラリアンが定着することで、人文・社会科学系の研究の国際化が進展すれば、その結果、国際的な大学ランキングが伸びるという効果も期待できる。このように考えてくると、図書館がしっかりしているということは、学問や研究の方法そのものに影響を与えることである、ということがわかる。

なお、前述のとおり、日本では従来、教員がサブジェクト・ライブラリアンの役割を担っていたため、図書館員によるその役割の定着が進まなかったものと考えられる。そのような歴史的経緯を踏まえて、「審議のまとめ 2010」では、図書館情報学以外の学問を修めたうえで大学院に進学し、主題の知識を活かして図書館情報学を学ぶなど、サブジェクト・ライブラリアンの養成課程の在り方から検討する必要があると指摘している。また、人材育成・確保のために、複数大学間での異動などによる、主題というパスでキャリアを重ねられる仕組み作りや、特定の主題を修めた者をそれに関連する学部等を有する大学の図書館で採用するといった、新たなキャリアパスを形成する必要性にも言及している。

5. 図書館の機能高度化に向けた図書館員の養成

図書館が新しい時代に求められている高度な機能を実現するためには、図書館員の人材育成・確保が最も重要な課題であり、そのための新しい仕組みを構築する必要がある。「審議のまとめ 2010」で示された人材の育成・確保の在り方をもとに、九州大学の大学院ライブラリーサイエンス専攻の取り組みから今後の可能性を検討してみよう。

5.1 大学図書館員の育成・確保の在り方

「審議のまとめ 2010」では、大学図書館を巡る状況の変化に応じて、養成すべき大学図書館員の技能も変化しており、次のような異なる専門性を有する人材をいかに養成していくかが課題であると指摘している。

- 1) 学術情報流通に詳しく学術情報基盤を構築できるライブラリアン
- 2) 特定の主題分野のコレクション構築を行うとともに、その主題に関わる学習・研究を行う利用者に対してサービスを行うライブラリアン
- 3) 教員や学生とコミュニケーションをとりながら教育課程の企画・実施に関わるライブラリアン

- 4) 研究者として図書館情報学の発展を担うライブラリアン
- 5) インターネット等の技術を駆使して新しい利用者サービスを構築するライブラリアン

そして、このような人材を養成する方法として、大学における大学院、学部、司書資格取得レベルの各教育及び大学図書館の現場における現職職員の育成を挙げている。また、大学図書館においては、人材の研修や育成とともに、優秀な専任職員を確保する観点からも、そのキャリアパスの形成について検討していく必要があると提言している。

大学図書館基準の「職員」に関する項目には、「大学図書館に課せられた高度の専門的業務を処理するためには、特に専門職員を配置することが必要である。専門職員には、原則として大学院において図書館・情報学等を専攻した者を充てなければならない。」と定められている。しかし、現実にはその原則に沿った職員配置がなされているとは言い難い。

「審議のまとめ 2010」や大学図書館基準で提唱された高度な専門性を持った図書館員を育成・確保するためには、キャリアに応じた多様な現職者研修を充実させるにとどまらず、大学院における専門教育の場をさらに整備して専門性の高い職員を確保すること、現職の職員も在職しながら大学院で学べる機会を作ることなどが必要である。さらに、今後の専門教育では、図書館情報学以外に様々な専門分野における主題知識もあわせて学べることで、現職の図書館員も大学院教育に参画すること、図書館をフィールドとした実践的なインターンシップを行うこと等により、高度の専門性を持った大学図書館員の育成・確保ができるものと考えられる。

5.2 九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻の取り組み

九州大学では、2011年度から大学院統合新領域学府に「ライブラリーサイエンス専攻」の修士課程（入学定員 10名／専任教員 11名、2013年度より 12名）を設置し、大学図書館や記録文書館、情報関連企業等で活躍する高度な専門性を持った図書館員やアーキビスト、大規模なコンテンツを扱う情報技術者・研究者等の組織的な育成を開始した。修士課程の学年進行が完成するのに合わせて、2013年度には博士後期課程（入学定員 3名／専任教員 7名）も開設した。

同専攻の教育研究上の理念は、「知の創造・継承活動」を支える「場」としての「ライブラリー」を科学し、ユーザーにとって真に意義ある情報の管理・提供を実現することである。その理念にもとづく教育内容と、入学者及び修了後の進路の例を図 1 に示す。入学者には、学内外の学士・修士・博士や社会人といった多様な志望者を想定しており、2013年度までに九州大学附属図書館の職員 3名が、就業規則改正による変形労働時間制の適用や他大学との人事交流を利用して、在職しながら学生として修学した実績がある。

2014年度現在のカリキュラム構成は、図 2 に示すとおり

り、図書館情報学、アーカイブズ学、情報科学を三本柱とし、情報の管理・提供に関連する諸領域を統合したものとなっている。なお、同専攻の構想と意義¹¹⁾、設置の経緯³⁾、社会人教育の現状等¹²⁾に関しては、それぞれ別稿を参照いただきたい。

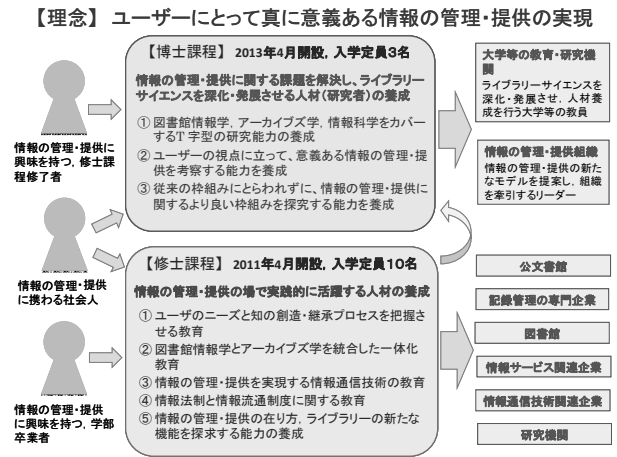


図 1 ライブラリーサイエンス専攻の教育研究上の理念と目的

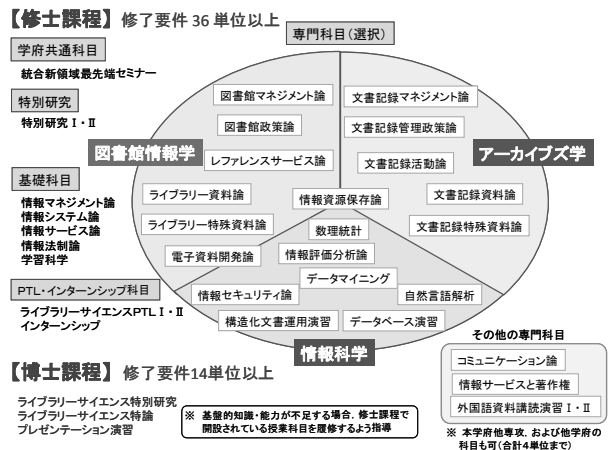


図 2 ライブラリーサイエンス専攻のカリキュラム構成

同専攻の特徴のひとつは、九州大学附属図書館と密接に連携した教育研究活動を行っていることである¹³⁾。図書館の施設や資料を利用した演習、図書館の現場の課題をテーマにした Project Team Learning, インターンシップ等を実施するなど、図書館を教育研究のフィールドとして大いに活用している。

人的な連携では、現職の図書館員が博士の学位を取得したうえで、他の教員と同様に設置審査を経て、修士及び博士後期課程の専任教員に加わっていることが注目される。まさに、「審議のまとめ 2010」で提示された「図書館職員が特定分野の学位を取得して教員になった」例であり、国立大学初の試みである。また、修士課程開設時に図書館専門員（課長補佐級）が専任講師を兼務していたものを、その後、博士後期課程設置の際に准教授の申請が認められたのに合わせて、管理職である課長に昇任させたのは、大

学が図書館員に示した新たなキャリアパスの一例として捉えることができる。専任教員となった図書館員は、人事管理上は事務職員として扱われているものの、専攻においては、教授会の構成員であり、個人研究室や研究費を持ち、特定科目の授業だけでなくゼミや学生の論文指導も行なうなど、他の教員と同等の責任を持って教育研究活動に従事している。当然、兼務による負荷はかかるが、現職者として図書館の現場を持っていることが教育研究上の強みであり、周囲の研究者からも同様に認識されていることから、図書館員が教員を兼務することの意義は大きいと言える。

その他、専任教員以外の図書館員も修士課程の授業に講師やコメンテーターとして参加するなど、実務経験を活かした教育支援を行っている。

さらに、ライブラリーサイエンス専攻の開設を機に、九州大学が2012年度から約10年ぶりに文学部に復活させた司書養成課程では、教員兼務の図書館員が講義科目を担当するとともに、学内非常勤講師の資格審査を経た現職の図書館員3名が、それぞれ実習科目を集中講義の形で担当している。司書養成という場面でも、図書館員が、授業の計画、実施から成績評価まで全責任を持って教育に直接関与している。

以上のように、九州大学では、図書館員でありながら准教授や学内非常勤講師をしたり、学生として図書館員が大学院に入学してきたりすることで、境目がない世界が実現している。ライブラリーサイエンス専攻の例は、大学図書館にとって新しいビジネスモデルであり、今後の日本の大学図書館の方向性を示すものと考えられる。

6. 図書館員の未来

おわりに、図書館員の得意なことと図書館員が一層活躍するために必要なことについて考察し、図書館員の未来について展望してみたい。

「審議のまとめ2010」では、最後に、大学図書館関係者、大学の管理運営関係者、文部科学省に対して、大学図書館機能の高度化等に向けた努力、配慮、支援を要請している。今後は、そのような図書館内外の支援等を期待しつつも、図書館員自身が得意分野を活かして変化する努力を続けることが重要である。

図書館の強みはコンテンツを持っていることであり、図書館員はそれらのコンテンツを熟知している必要がある。そのうえで、図書館員が得意なことはなにかと考える場合、図書館員の気質である「まじめな性格」を武器とすべきであろう。例えば、大学の研究成果の集積と発信を行う機関リポジトリの構築は、情報基盤センターのような部署で担当する選択肢もあったが、理工系の人にはずっと同じことをするのが苦手の傾向が見られるため、図書館員の仕事にして、図書館が「出版」に関わるようにしたという経緯がある。新たなサービスとなる教材開発支援に関しても、授業等の学習資源の保存、共有、普及にとどまらず、図書館員が自ら著者や編集者となって、それらの情報資源を作っていくことで、図書館の性格付けが大きく変わる可能性が

ある。つまり、図書館員がその気質を活かして専門性を発揮し、学術情報のコンテンツを作り、それらを発信していくことが将来の図書館の発展につながるであろう。

図書館員が一層活躍するために、どのような努力で図書館員は変われるかといえば、注目される存在になることが第一だと考えられる。ユーザーからの期待や話題の中心になることが、図書館員が変化するためのインセンティブとなりえる。新しいことをする際に、最初のことであれば周囲から話題にしてもらえ、後をつけていくよりは楽しいはずである。また、図書館員が自分たちの名前前で色々なことを表現することで、ごく自然に論文のような形でまとまってくることになる。名前がでると励みになり、責任感も出てくるうえ、論文等の蓄積から博士の学位を取得したり、大学院に入る時にも業績として評価されたりするようになるだろう。

先に見たとおり、大学改革の流れは強まる一方である。その中で、図書館が新しい機能を持ち、新たな役割を果たして、大学における学習・教育・研究の中核として不可欠な組織、機関、場となっていくことが期待される。そのためには、図書館員が自らの変わりゆく役割を意識しながら、新たなステージに踏み出すことが求められる。

注・参考文献

- 1) 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会。“大学図書館の整備について(審議のまとめ)ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー”。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (accessed 2014-03-14).
- 2) 科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会。“学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議のまとめ)”。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm, (accessed 2014-03-14).
- 3) 有川節夫, 渡邊由紀子. 大学図書館職員の育成・確保に向けた新たな取り組み(特集 大学図書館 2011). 図書館雑誌. 2011, vol.105, no.11, p.738-740.
- 4) 文部科学省。“国立大学改革プランについて”。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/11/1341852.htm, (accessed 2014-03-14).
- 5) 大学基準協会. 大学図書館基準(昭和27年6月決定, 昭和57年5月改正). 1952, 1982.
- 6) 有川節夫. 附属図書館の目標と当面の課題. 図書館情報(九州大学附属図書館). 2001, vol.36, no.4, p.55-59.
- 7) 有川節夫. 国立大学図書館の課題と解決の試み. 大学図書館研究. 2004, no.70, p.1-8.
- 8) 有川節夫. 図書館が変われば大学は変わる. 国立大学図書館協議会ニュース. 2003, no.70, p.16-26.
- 9) 溝上智恵子, 呑海沙織, 綿拔豊昭. 高齢社会につなぐ図書館の役割: 高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み. 学文社, 2012, 168p.
- 10) 九州大学. 九州大学概要. 1984, 昭和59年度, p.28-31; 2013, 2013年度, p.33-34.
- 11) 渡邊由紀子, 富浦洋一, 吉田素文, 岡崎敦. 九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」の構想と意義. 情報管理. 2011, vol.54, no.2, p.53-62.
- 12) 渡邊由紀子. 九州大学ライブラリーサイエンス専攻における大学院教育の現状(特集 社会人大学院). 大学の図書館. 2011, vol.30, no.11, p.191-193.
- 13) 石田栄美. 九州大学大学院ライブラリーサイエンス専攻の概要と附属図書館との連携(特集 図書館職員の研修). 名古屋大学附属図書館研究年報. 2011, no.10, p.1-11.

Special feature: Hints of Librarians. Changing Role of the Academic Librarian. Setsuo ARIKAWA*¹, Yukiko WATANABE*² (*¹President, Kyushu University, *²Head, Service Division, Kyushu University Library/ Associate Professor, Department of Library Science, Graduate School of Integrated Frontier Sciences, Kyushu University Library 6-10-1 Hakozaki Higashi-ku Fukuoka 812-8581, JAPAN)

Abstract: Focusing on academic libraries, this paper discusses the changing role of the librarian based on the “Summary of discussion” by the Science Information Infrastructure Working Group (2010) and the Scientific Information Committee (2013) in the Council for Science and Technology. After reviewing the current status of universities and academic libraries, we describe the new roles and the expectations required of academic librarians, considering the changes which may occur in the library of the future. It also discusses how to build the mechanisms for human resource development and securing of librarians, while introducing activities of “Innovation Center for Educational Resource” and “Department of Library Science” at Kyushu University. Finally we present the future outlook for librarians.

Keywords: academic library / university reform / librarian / librarianship / human resource development / subject librarian / educational resource development / library science / Kyushu University Library